

尾瀬ネットワーク通信

2005年11月20日 VOL.8. 4(25) NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

条件付きで合意

尾瀬沼野営場再整備問題

尾瀬自然保護ネットワークなど自然保護民間6団体で構成する尾瀬を守る会(中根一郎会長)が廃止を申し入れていた尾瀬沼野営場(キャンプ場)の再整備問題は、現地説明会などを経て環境省北関東自然保護事務所(日光事務所)が当初計画を柔軟な対応で大幅に変更したことにより守る会が合意した(守る会の申し入れ書の内容等については8月20日付の「ネットワーク通信」を参照されたい。

日光事務所による主な修正案を含む整備計画は次のとおり。

- 1) 従来の78テント設営箇所を30箇所に縮小する。
- 2) 裸地化した箇所には木製のデッキを設け、デッキと歩道(木道)を木道で結ぶ。
- 3) 設営箇所(デッキ)の面積は、9㎡(2~3人用、23箇所) 14㎡(4~5人用、7箇所)の2種類とする。
- 4) 野営場エリア内には水場や炊飯施設を設けない。環境省の公衆トイレ前の水場を利用することとし、ここでも食器洗いなどの行為は禁止する。
- 5) キャンプ場のうち、比較的裸地化が進展していない奥の針葉樹林帯(小淵沢田代側)の整備は控え、植生の完全回復を図る。
- 6) 利用上の規則に違反していないか、管理受託者(尾瀬沼ヒュッテ)によるきめ細かなチェックの実施を日光事務所が指導する。
- 7) 全体として全国の高山におけるキャンプ場のあり方のモデルケースとなることを心がける。

(高橋 喬)

世界遺産って何なのか

客寄せパンダはもう要らない

手元に大手旅行会社の山旅のパンフレットがある。秋と冬の特集だが、その中に「世界自然遺産を歩く」というキャッチフレーズで屋久島や知床のツアー客募集のほか、世界遺産の熊野古道、吉野・大峰などの参加者募集のページがある。いまやツアー会社にとって世界遺産は格好の目玉商品なのである。

ひところ、富士山と尾瀬が世界自然遺産候補として、本気でささやかれた。しかし、富士山はトイレの問題が解決しない限り不可能とわかって、登録の話は立ち消えになった。尾瀬については会員の皆さんがご存知のとおりである。

それではというので、出てきたとしか思えないのが、尾瀬ヶ原と尾瀬沼を「ラムサール条約湿地」として登録する件である。この会報が出る頃には、申請手続きは終わっているかもしれない。

この申請に対しては、別に異論はない。この条約の目的は「水鳥の生息地等として国際的に重要な湿地、そこに生息する動植物の保全を促進すること」となっている。尾瀬のどこにどれほどの水鳥が生息しているのか、ほとんど見たことがない。晩秋の頃、原の池塘でたった1羽のカモを見たくらいである。尾瀬で確実に増えている動物は、シカくらいのものである。

尾瀬ヶ原(とくに下田代)の乾燥化が急速に進んでいる。このままで湿原から単なる荒野に変貌するのは、もはや時間の問題であろう。原因が人為的(沼尻川からの取水)であっても、ラムサール条約の精神に反しないのだろうか。

尾瀬の国立公園としての独立構想もそうだが、こうした一連の動きは、平成8,9年をピークに減少を続ける尾瀬の入山者数に頭をかかえる行政や民宿、山小屋などの苦肉の策とし

か思えない。宿泊客の減少はアプローチが便利になりすぎて、もはや「遙かな尾瀬」ではなくなってしまったからである。そうしてしまったのは誰なのか、これからどのような自助努力をするのかを考えずに、とにかく客寄せのキャッチフレーズになりそうなテーマを探して飛びつくのは、誘客に役立てようとの魂胆が見え見えで、物言えぬ尾瀬に同情せずにはいられない。
(高橋 喬)

群馬県側入山指導報告

今年度第2回群馬県側入山指導は9月3日(土)から4日(日)にかけて、野生シカ調査をはさんで実施された。参加者は池田稔夫、坂本敏子、長島睦世、深山美子、横田有弘、清水博之の6名。

3日は早朝に並木駐車場で、リーフレットとアイドリングストップステッカーの配布および入山指導を行い、日中は山ノ鼻～牛首分岐～ヨッピー橋～東電小屋で案内と木道周辺の調査を行った。

端境期でハイカーは少なかったが、花は思いの他多かった。また木道については、牛首分岐からヨッピー橋方面へは、新しくなり歩きやすかったが、竜宮方面は損傷が目立った。撤去した木道をいつまでも放置しておくのが気になった。

4日早朝、至仏山荘前に熊が出没し、財団職員や小屋の関係者が爆竹などで追い払おうとしたが、一向に移動する気配がなく、周辺の通行が中断されるという騒ぎが起こった。

(群馬県側担当理事 清水 博之)

平成17年度入山指導を終えて 福島側入山指導報告

本年度の福島側入山指導は、5月～10月の間、6回実施しました。

参加者は

第1回(5月27,28,29日)坂本敏子、佐藤信良、武繁春、田中志朗、本戸信男(5名)

第2回(6月17,18,19日)磯部義孝、佐藤信良、島上健、横田有弘、(4名)

第3回(7月16,17,18日)磯部義孝、大橋清、大橋文江、佐藤信良、椎名宏子、初谷博(6名)

第4回(7月22,23,24日)赤塚耐三、坂本敏子、佐藤信良、高橋喬、田中志朗、大橋清次(6名)

第5回(9月17,18,19日)池田稔夫、磯部義孝、伊藤アケミ、坂本敏子、佐藤信良、椎名宏子(指導員6名、その他賛助会員及び一般参加者6名計12名)

第6回(10月8,9,10日)伊藤アケミ、貝田久、

坂本敏子、佐藤信良、円谷光行、深山美子、横田有弘(7名)

5月28日 5月中旬の降雪で大江湿原入口までの林間の木道には多く雪が残っていた。午前8時現在で駐車場112台。入山者は少なくシャトルバスは30分間隔で御池を出発。入山者へ足もとには特に注意、尾瀬沼南岸はできたら避けることを助言する。29日新しいヒュッテ支配人・星光祥氏へ挨拶に向く。

御池の駐車場は5月24日の山開より268台の車が在庫した記録が残っていた。

6月18日 朝5時宿舎で目がさめた。一昔前は村内を御池に向かう自家用車の走行音がとぎれなく聞こえていたが最近あまり聞こえない。7時添乗開始、横田氏は先輩の指導員とバスに乗り込む。駐車場125台、林間の木道4ヶ所に残雪あり、水芭蕉、タテヤマリンドウ、沼近くにリュウキンカ、山桜が少し残っていた。

至仏山の調査報告書を届けにビジターセンターを訪問した(保護財団責任者:企画課技師・桜沢仁氏)。昼食後、御池ロッジ裏より小淵沢田代経由大江湿原に向かった。山道倒木が数箇所残雪多く、沼山を最終バスで下った。19日会津バス控え室で、今年は山開き以来250台を超えた日がないと話を聞いた。ロッジ前にバスロータリーが新設され、来年からは御池まで観光バスも来る予定と聞く。大江湿原にオオシラビソの花粉が黄色の帯状に流れていくのが目視された。

7月16日 桧枝岐村に到着。街並みに多くの車、大勢の人々、山開き以来の賑わいを見せていた。翌朝、6時10分活動開始。駐車場は7時に満車となる。初谷氏、大橋清氏の両名、単独で解説を始めた。11時添乗解説を切り上げ大江湿原のキスゲ観察のため、沼山登山口へ向かった。初めての試みとして、無作為に20名ほどのグループを選び、尾瀬沼まで解説をしながら入山者を案内した。木道には久しぶりに長い行列が出来た。入山者から感謝された。「何度も来ているのに、こんな案内を受けたのは初めてで、とてもラッキー」と言っていた。18日も9時半には駐車場満車になった。初谷、大橋清、両氏とも解説は素晴らしい。

7月23日 先週と同じく入山者多く、仙台在住の稜友会より案内を依頼され、坂本指導員にお願いする。

9月18日 一般賛助会員を交えた秋の研修会。裏燧林道～渋沢大滝方面で、将来の解説に

きつと役立つ催しであった。渋沢大滝を訪れたのは初めての人も多かった。

10月9日 磯部理事の住む須賀川公民館主催の合同トレッキング一行53名の案内を依頼され、指導員全員で尾瀬沼まで解説をしながら案内した。久しぶりに貝田指導員が活動に参加した。数年間のうち新しくなった御池売店、ヘリポート、老朽化した尾瀬沼キャンプ場の再開予定地を案内した、現地は少しずつ変わったとの思いが強かったようだ。



御池売店入口にて・本年最終参加の指導員一同
左から伊東・貝田・深山・横田・坂本（敬称略）

10月10日 本年度養成講座修了者、円谷氏が添乗解説の様子を実際に見聞するため参加した。午前11時本年度のすべての活動が無事終わった。期間中仙台、須賀川の2つのグループを案内、謝礼を頂き本会会計へ繰り入れた。再会を約束してそれぞれの帰路についた。

（福島県担当理事 佐藤信良）

尾瀬ヶ原野生シカ調査報告

今年度第2回野生シカ調査は9月3日夜半に行われました。参加者は池田稔夫、清水博之、高橋喬、横田有弘、長島睦世、深山美子、坂本敏子の7名。確認頭数は31頭でした。

まず川上川を過ぎた所で、歩いて行く木道のすぐ脇の草むらから、急に立ち上がり走り出した一頭に驚かされ、これを皮切りに、下ノ大坩川手前までで次々に30頭を確認しました。

そこで下田代十字路をネットチームとほぼ同時刻にスタートして来た尾瀬高校チームと出会い、それ以後は一頭も確認することはありませんでした。

ビームライトの照射は、臆病なシカにはすぐには消えない強い衝撃を与えるようです。

（野生シカ調査担当理事 坂本 敏子）

研修会を終えて「夏・秋」研修会報告

・夏期月山研修会

2005年度尾瀬 NW 研修会は8月7～8

日に山形県月山にて開催しました。これは指導員研修会で尾瀬以外の国立公園特別保護区等の現状を観察し、指導員の技術向上を図るのが目的です。研修に当たっては地域の現状に詳しい山形県自然公園管理委員で環境省自然公園指導員、山本克実氏に月山の歴史と高山帯の植物、さらに弥陀ヶ原湿原の池塘に群生するオゼコウホネ等を観察し説明を受けました。血塘ではオゼコウホネの写真撮影に、湿原に踏み込むカメラマンを見張る看視員が早朝より日没まぎわまで湿原への立ち入りを防ぐための指導看視体制を取っていました。一部池塘の縁が壊れそうな部分もあり、池塘崩壊の危険性も確認できました。



月山登山道の「いしだたみ」部分。降雨で流されないよう「割グリ」等で敷き詰めてある。

月山は元々山岳信仰の山で現在も登山者の大半が御山参りの登山であり保護対策も進んでいるが、ハイカー「観光客」の過剰入山に追い付けないのが現状です。

弥陀ヶ原湿原「草原」は駐車場から近く、観光客からは人気の場所です。オゼコウホネ群生地池塘まで30分との近距離が湿原池塘の崩壊を早めている。早急に何らかの手だてをと県に要請しているが、予算の面で明確な回答が無いとのことでした。

参加者は指導員8名、会員3名一般3名の計14名でした。月山までの道案内は地元に近い古内指導員にお願いし、無事終了しました。

参加者

指導員：佐藤義信、古内公雄、高橋喬、永島勲、椎名宏子、伊東アケミ、長島睦世、磯部義孝
会員：桑畑良香、白井智恵子、小林ミヨ
一般：高沢真理、大山玲子、穂満加代子
・秋期裏燧コース研修会

秋の秋期裏燧コース研修会は9月17～19日の日程で開催しました。コースは裏燧コースで紅葉には少し早すぎましたが、木の実草の実など花の時期とはひと味ちがう初秋の尾瀬を視察することができました。

裏燧は初めてとの参加者などは尾瀬沼、原とは全く違う感じですと隠れた尾瀬の良さを実感していたようです。段吉新道、平滑の滝、三条の滝を経て渋沢温泉小屋泊。ここでは渋沢沿いの露天風呂を男性たちは楽しみました。



渋沢大滝の前にて

19日早朝、アタックザックと身を軽く渋沢大滝へと出発。途中、トチの実ゴロゴロの登山道を進むこと約45分、待望の大滝が姿を見せました。川が行く手をを遮るが、手頃な石で飛び石を置き全員大滝の下までたどり着く。しぶきの下で記念撮影、皆さん納得した様子。宿まで引き返し朝食をとる。只見川沿いに下り小沢平へ。千葉方面からの参加者は、ここから奥只見湖を経て新潟県小出経由で帰路につく。バス待ちの時間を利用して全員で奥只見湖船着場までお見送りをして御池まで戻り無事解散。

参加者は12名でした。夏・秋と2回の研修会を実施しましたが、時期が近かったことと、年間計画の入山指導と重なったことなど、反省すべき課題は多く残りましたが概ね成功と思います。参加ご協力戴きました会員の皆さまに御礼申し上げます。

参加者：12名（指導員6名・会員4名・一般2名）

指導員：佐藤義信、坂本敏子、池田稔夫、磯部義孝、椎名宏子、伊東アケミ、

会員：桑畑良香、白井智恵子、小林ミヨ、金成政行

一般：高沢真理、穂満加代子

2回の研修会をもって会員2名が拡大できました。入会頂いた方に感謝申し上げます。

（研修会担当理事 磯部 義孝）

「尾瀬の自然展」を開催

埼玉県北西部の児玉町で10月初めに開催した「尾瀬の自然展」について報告いたします。

日程 平成17年10月1日・2日

場所 児玉町総合文化会館（セルディ）

児玉町から依頼を受けて、ネットワークは特別協賛という形で参加いたしました。

今回の自然展は、次の3点を中心に写真展示、パネル解説、DVD・ビデオ映像により尾瀬の現状と問題点を発表いたしました。

至仏山東面登山道の荒廃状況

尾瀬の成り立ち、尾瀬と東京電力の関係
桐生市の私立樹徳高等学校理科部の研究論文、至仏山の植生復元に関する基礎研究「ニッケルが植物生の生育に与える影響」



解説パネル前にて

左から清水、永島各理事・高橋理事長・前田、鎮目各指導員（本年度養成講座修了者）

わずか2日間でしたが、大勢の方にご来場を頂き、尾瀬の現状や問題点の啓発、ネットワーク活動のPR等の成果があったのではないかと思います。東面登山道の荒廃写真は強烈なインパクトを与え、至仏山の入山料の徴収については、肯定的な意見が多くありました。

樹徳高等学校理科部顧問の広井勉先生にはご多忙のなかご指導や研究論文の借用など、ご支援を頂き深く感謝申し上げます。

展示会場の設営や後片付け等では地元の児玉町山岳協会の坂本会長や新井弘子さんをはじめ多数の方にご協力を頂きました。また、片品村役場からは各種の資料提供を頂きました。ご支援ご協力を頂戴した関係各位に紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

なお、当日は高橋理事長にもご来場を頂いたほか、清水博之理事と吉田敏男さんには終日、田中志朗さんには両日の午前中、鎮目安康（シズメヤスオ）さん、前田佳胤（マエダヨシツグ）さんにもそれぞれお手伝いを頂きました。心から御礼申し上げます。

（尾瀬の自然展担当理事 永島 勲）

至仏山東面登山道の調査報告

平成17年度の「至仏山東面登山道利用実態調査」結果について報告いたします。

調査日 平成17年9月9日・10日（土）

場所 至仏山東面登山道

（山の鼻～至仏山頂、2.9Km）

行程 鳩待峠 山の鼻 至仏山 鳩待峠

参加者 松前雅明、西山伸一、藤田英忠、吉田敏男、加藤憲司、永島勲

調査報告（概要）

(1) 東面登山道の状況

東面登山道の標高1800mの「D地点」は、荒廃（植生の破壊）が最も著しい場所。広範囲に植生が破壊された場所は、その形から「南米大陸」と呼ばれている。

雨水は、低くなった荒廃地に集中し、濁流となって登山道周辺を侵食し、土壌は更に流失する。これに、入山者の踏み付け等が加わり、荒廃は進行する一方だ。

植生の基盤となる土壌が大量に流失して、地中の岩盤が露出して植生の復元はもはや不可能と思われる箇所が年々増加している。

土壌流失防止策の状況

丸太で斜面を正方形に囲んであるが、既に土壌の大半は流失し、残った岩石の上に丸太は浮き上がっている。

材木（板）による流路の変更はそれなりの効果は認められるが、材木を設置した場所は雨水の流路となり、他の場所より早く地中の岩盤が露出してしまっている。

蛇籠は植生地と荒廃地との境界における土壌の流失防止に効果があるが、蛇籠自体が沈下した場所では、植生地の法面が露出して、その効果が疑われる。

地中岩盤の露出

侵食の激しい登山道は、地中の岩盤が露出している箇所も多い。土壌のまったく無くなってしまった登山道周辺を目視する限り、人間の手による植生の復元は極めて困難で、手遅れの感を否めないと感じた。

植生復元の状況

植生復元作業は極めて小規模であるが毎年行われている。「D地点」下部では、岩石で囲んだ小さな平坦地を4箇所造り、試験的に行っている。ミタケスゲ等の種は発芽しているが、その後の成長の状況は未確認。

東面登山道荒廃（植生破壊）への対応策

まず、雨水の流路をコントロールして土壌流失を防止することが重要。荒廃の原因の一つが、入山者の踏み付けによるものであることは明らかだ。この人為的な影響を最小限にするために、自然公園法の改正を契機に、速やかに至仏山を「利用調整地区」（入山規制）に指定し、「入山料」の徴収が待たれる。また、入山者数を少なくする方策として、東面登山道を登り専用的一方通行にすることも必要であろう。これは下りでスリップ事故多発の東面登山道では、入山者の安全にも結びつく。

(2) 入山者の利用実態

移動しながらの調査であったが、東面登山道

で81名、至仏山頂で41名、南面登山道で25名、計147名（内訳：男子90名、女子57名）の入山者が確認できました。



D地点の植生復元状況

そのほとんどが中高年齢者で、装備やマナーも良くコースを外れて歩く人は見かけなかった。東面登山道を下る人は一様に滑りやすく「厳しいコース」と話していた。

私たちは「このコースは登りに使った方が楽ですよ」と指導を行いました。

(3) 携帯電話の通信状況

鳩待峠にアンテナのあるドコモの携帯電話の通信状況を確認してみました。

東面登山道の標高1800m付近からアンテナ1・2本で通話可能。高天ヶ原ではアンテナ3本立ち通話に問題なし。至仏山頂および小至仏山頂ではアンテナ立たず、これは予想外の結果だった。原見岩では通話は良好でした。

なお、来年度は調査開始10周年記念として趣向を凝らした調査を予定しています。会員各位の大勢の参加を期待しています。

（調査担当理事 永島 勲）

武田久吉著「民俗と植物」を読んで

武 繁春

武田博士は植物学者であると同時に民俗への洞察にも優れていた。植物と民俗について、昭和7年から18年にかけて新聞や雑誌に掲載したもの21編に筆を加えて、昭和23年「民俗と植物」が刊行された。

植物の名前はよく地名に用いられる。「蕨が沢山生えているから「蕨平」、柳が多いので「柳沢」・・・」これらは「何等問題の起こりようが無い。」が、「植物を知らないで見當の付き兼ねるものもあるし、方言などに注意しないと、飛んだ當字をすることになる」「・・・の檜は、何れも我々の普通呼ぶヒノキであるが、尾瀬沼の東に峙つ檜ノ高山の檜はクロビ即ちネズコであ

る。」また、「本州にはツガの種類が二種あって、その一は温帯産のツガ、一は亜寒帯産のコメツガである。」が、「尾瀬の長蔵小屋で食膳に添える柂の木箸（中略）はオオシラビソと見なければならぬ。尾瀬ではオオシラビソをツガ、コメツガをベニツガと呼ぶのだから」このオオシラビソのことを、「青森ではトドマツ、越後ではブサマツ、立山では禅定松、八ヶ岳ではオモタという。」ように、「草や木には地方名が色々あって、それも間違いの種となる。」

また、片仮名なら問題がないが、漢字となると注意を要するとしている。「越後の銀山平へ遊んだ人は、須原口で拓殖会社の事務所の厄介になったことであろう。あの須原口は、須原への入り口の意であろうが、須原とはスス原の約言であって、あの区域には開墾その外のために、森林を伐り火を掛けなどした跡地が、往々スキの繁る原となっている。それを称してスハラと言ったものであるから、須原と書くのも無意味な當字に過ぎない。銀山平のズット上手で、只見川籠渡しで越すあたりを鷹ノ巣と呼ぶが、あれは高ノスハラの転化かと考えるが確証が無い。後遊の土の探求を待って決定す可きである。」

これは完全な間違いの例として、「尾瀬ヶ原の南を限る山上に、菖蒲平という景勝の地がある。近頃の粗骨なハイカーはショウブダヒラと読むが、実はアヤマダヒラである。然らば其処にアヤマが生ずるかといふに、ヒアフギアヤメも、カキツバタも、とに角この属のものは、一少部分以外、何一つ野生していないのも不思議である。これは恐らくその地に多く生ずるキンカウクワの葉でもアヤマと誤認して、斯かる名を与えたのであろうが、寔（まことに）不都合千萬な話である。」

武田博士の文章には、会津や越後や信濃など、それも僻地とも言える土地の記述が目立つが、尾瀬周辺、特に檜枝岐に触れる時、そこからは博士の愛情のようなものが感じ取れるのは私だけでしょうか。「さて奥州には、こんなブナ林を開拓して、小さい村落を形作り、僅ばかりの耕作と、山仕事とで生計を営む者が少なくない。奥州のホンの入口ではあるが、岩代南会津郡の一番奥に、檜枝岐と呼ばれる百戸許の村がある。地は海拔九百四五十米の高さで、四方を山で囲まれ、檜枝岐川がその中央を北流して、村を二分している。」と紹介し、自給自足のこの村で、昭和16年の秋には、作物が鼠により食い荒らされた事に触れている。「鼠は地に潜ってジャガイモや大根を食い、倒れた粟や蕎麦の穂を食う

という始末であるが、屋外の而も人家から離れた畑が多いので、一と通りの方法では予防も駆除することも出来ない。結局凶作と同一という有様である。」

それほどまでの被害となった原因は、前年の秋にブナが良く実を結んで、これを食べた鼠が大繁殖したことによるとのこと。それでも、豊作の翌年にはブナは消耗して結実しなくなるので、繁殖した鼠は年と共に減少していくと述べている。「その様に因果が小車の如く廻ることは、自然界には有り勝の事であり、無言の植物界にも、栄枯盛衰は常に付き纏う事象で、それを逃れる訳に行きかねる。自然界を巧みに利用しようとするれば、深く諸の現象を考究し、自然の理法に従ってそれを応用することが必要である。一時の成功に眩惑し、自己陶醉にかかり、自然を征服することが思いのままに出来ると誤解すると、思わぬ蹉跎に出会うことを十分に戒慎しなければならない。」今に生きる戒めであろう。（一部を現代用字とした）

「武田久吉先生尾瀬入山100年記念講演会」

主催：奥利根自然センター・尾瀬を守る会
群馬県立尾瀬高等学校

後援：日本自然保護協会

期日：11月23日（水・祝）・入場無料

時間：12:30～16:00

場所：沼田市・群馬県立尾瀬高等学校

ビデオにて武田先生が尾瀬を訪れた姿を撮影したものが紹介されます。詳しくは事務局まで。

新入会 新しく私どもの仲間入りしました。

- ・小林ミヨさん（郡山市） 紹介者・磯部
- ・金成政行さん（いわき市）^{かなり} 紹介者・坂本

NPO 尾瀬自然保護ネットワーク
〒100-0014
東京都千代田区永田町 2-17-5-203(株)SEC 内
電話 03-3851-0321/FAX 03-3581-2178
http://www.geocities.jp/oze_net/

理事長 高橋 喬
事務局長 椎名 宏子
編集担当 島上 健
HP 担当 東雲 明

